

放浪の戦士

デルフィニア戦記 1

茅田砂胡

中央公論新社



目次の操作方法について

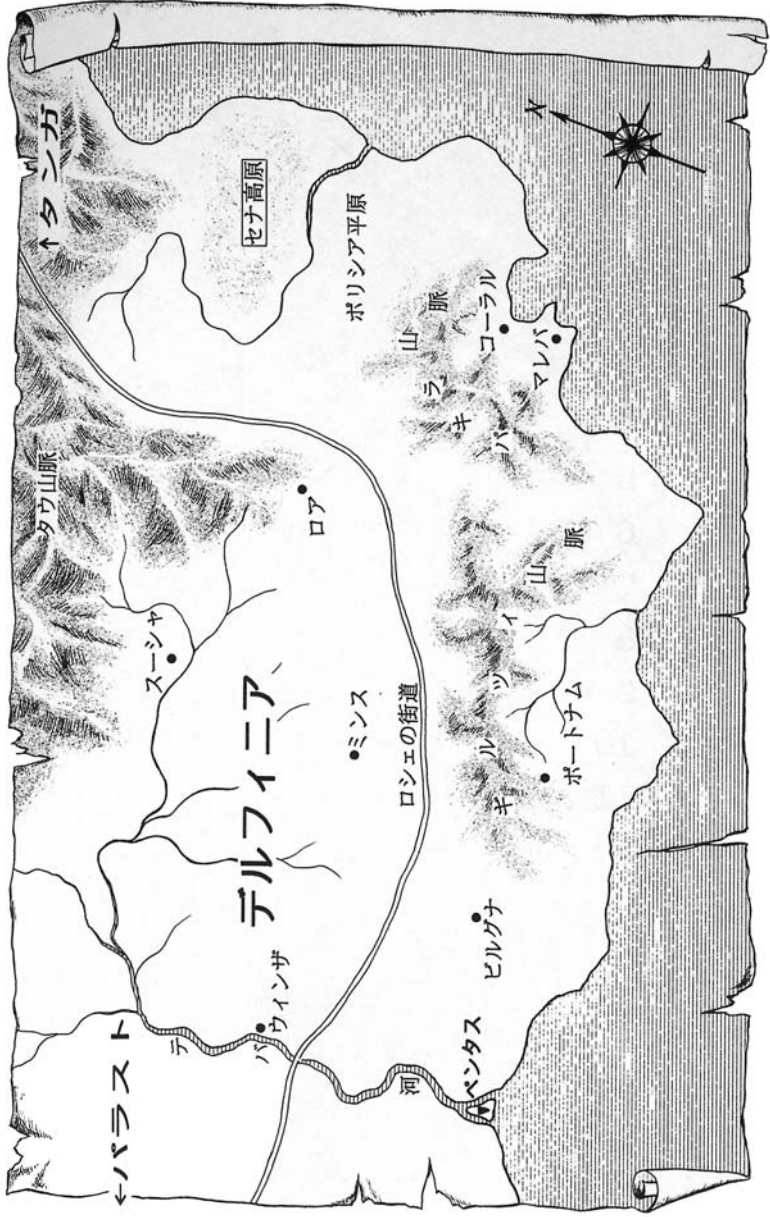
・表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わります。ここでクリックすると、該当の頁までジャンプさせることができます。

カバーイラスト	沖 麻実也
挿 画	
カバーデザイン	しいばみつお (伸童舎)
タイトルロゴ・マークデザイン	
水野デザインルーム	
地図作成	矢口 令

目次

序章	7
1	9
2	24
3	41
4	62
5	99
6	129
7	145
8	179
9	213
10	227
11	241
あとがき	248





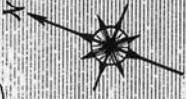
↑ タンガ

セナ高原

ポリシア平原

キバ山脈

マレバ



タウ山脈

ロア

スーシヤ

デルフィニア

ミンス

ロシェの街道

山脈

ギルツィ

ポートナム

← バラスト

テ

バウインザ

河

ペンタス

ヒルグナ

放浪の戦士

デルフィニア戦記 1

A RECORD OF THE
Pelagian Wars

序章

夢を見ていた。

幼いころの夢だった。

どこまでも続く原野と、冷たく頬を切る風。

豊かな毛皮と、鋭い牙と、長い尾の友人たち。

見比べると自分がひどくみすぼらしい姿に思えて
いやだった。牙も尾も毛皮もない。

どうしてかと訴えると、立派な黒い毛皮の父親は、
大きな口を開けて笑ったものだ。

お前は二本足の獣だから、と。

もっと大きくなったら自分にも尾が生えて牙が生えて四本足で走れるようになるかと訊くと、父親は、お前はずっと二本足のままだと言った。
つまらなかつた。

きれいな線を描く仲間たちの体がうらやましくて仕方がなかつた。

それでも仲間にならずに走れたし、獲物を狩ることもできた。父親も、お前は今のままがいいと言ってくれたが、気分は晴れなかつた。

仲間には比べると自分の姿はどうしても不格好だししか思えなかつたのだ。

がっかりすることもないと慰めてくれたのは、ただ一人の二本足の友人だった。

自分も含めて二本足は好きでなかつたし、不格好だとも思っていたが、その友人だけは別だ。

父親と同じ豊かな黒い髪、海の色瞳。いつも優しい、きれいな友達。

二本足には二本足にしかできないことがある。そ

う言つて、手を使つての戦い方を教えてくれた。

手に何かを握つて戦うというのはそれまで考えたこともなかつたが、友人の教えてくれる剣の動きには興味を覚えた。五歳の時には短剣を握り、八歳の時には今の剣を握つていた。戦うことは好きだったし、強くなるのは楽しかった。

緩やかに伸ばした体の下に、ふつくらとした地面を感じている。投げだした手足を、柔らかく萌えた草が受けとめている。目を閉じていても暖かい陽光が全身に降りそそぎ、甘い花の香りを含んだ風が頬を撫でるのがわかつた。

快い眠気に身を任せながら、ぼんやりといぶかしく思う。

今は冬のはずだ。

枯れた原野を風雪が白く染めあげ、空は重く、太陽はもつと弱々しく頼りなくあるはずだ。

なのに大の字に横たわつた全身で、濃厚なまでに甘い香りと暖かい空気を感じている。

こんなはずはない。

北の原野に咲く花はもつと涼やかだ。ひんやりと氷にも似た厳しい香りがする。

雪があるのに、こんなに柔らかく草が萌え、花が開いているはずはない。

これは夢なんだ。

春になつた夢を見ているんだ。

半ば以上眠りに落ちたまま、無意識に左手を動かして、腰のあたりを探る。

堅い金属が手に触れた。

現実の感触だつた。

とにかく身を守る武器を身につけていることだけは確からしい。

それなら何も恐れることはないのだ。

もうしばらくすれば、あの二本足の友人が起こしに来るだろう。

安心して、例えようもなく心地よいこの夢に身を任せることにした。

1

その男は、絶体絶命の窮地に立っていた。

呼吸は荒く、振り向いた目は険しく、剣を握る手にも足取りにも余裕がなくなっている。

黒い髪は乱れ、日に灼けた逞しい長身のあちこちに返り血が飛んでいる。

これを襲撃している敵はといえば、実に十人もの集団だった。それも相当に手強かった。剣を取る手つきにも実際の戦闘にも、かなりの年季が入っている。皆、一言も発せず、殺気を噴きあげて男の退路

を断とうとしている。

物取りにしても遺恨がたにしても恐ろしく大胆な所業だった。

人気のない野道とはいえ、春の陽はまだ中天にある。どこで誰に見られないとも限らないのだ。

それがわかつているのかどうか、襲撃者の群れは男を逃がさぬように牽制しながらも、神経質なまでにあたりに気を配っている。

しかし、今しも斬って倒されようとしている男の技倆は並々ならぬものだった。

この曲者たちは実に十五人以上もの大人数で襲いかかってきたのだ。並の剣士ならば一瞬で物言わぬ骸になるところを、孤軍奮闘し、五人を返り討ちにし、一度は包囲を抜けたのだから、たいへんなものである。

男は旅姿だった。それも長距離を旅してきたらしい。豊かな長身を覆う革の衣服も外套も、だいぶ痛んでいる。

年は若い。二十代の半ばくらいだ。

その見事なまでの剣の冴えと実用的な衣服からすると、さしずめ仕える相手を転々とする傭兵稼業で食べている者のようだった。

その一人を、卑怯にも大勢で取り囲んで殺そうとしている連中はといえば、皆、鎖帷子に紋様入りの長上衣、簡易兜、手袋、飾りのついた長靴、手にした剣も腰帯も揃いの揃えである。

これはならず者どころではない。自由戦士でもない。どこかの城か貴族の館に仕えている従騎士の身なりそのものだ。

面妖なことである。

白昼堂々、主人持ちの騎士たちが一介の自由戦士に襲いかかったりするわけがない。

日も暮れた人里離れた山道で、野盗の群れが旅人の懐中を狙って襲いかかるのはわけが違う。

こんな卑怯卑劣な行為に手を染めては、騎士たる者の名誉も誇りも地に墮ちるはずだった。

激しい斬りあいの野道の隣は一面の花畑になっていた。低い花ではない。大人の脚まで埋まるほどの高さがある。薄い黄色の花が陽光を受けて満開に咲き開いてる。

追いつめられた男は、この花畑へ逃げこんだ。

囲まれるのを避けるためにはそこへ逃げるしかなかったのだ。鮮やかな黄色の中を、地味な色の外套が走る。

「逃がすな！」

何といっても数の優勢は圧倒的だった。襲撃者どもは花を蹴散らして進み、たちまちぐるりと男を包囲してしまっただのである

振りきれないと悟った男は足をとめ、刺客の一団を眺めまわした。少しでも息を整えようとする。

ここまで追いつめられながら、男の態度は落ちつき払ったものだった。が、これまでと思つたに違いない。

正眼に剣を構えなおし、一人でも多く道連れにす

る覚悟で、刺客の一団に相對した。

合計十本もの抜き身の刃がずらりと揃い、一人の男に向けられる。可憐な花畑には不似合いな不吉な輝きが、一斉に男に向かって走り寄った。

一人か二人は倒せてもそれまでだ。残りの刃は必ず男を切り裂くに違いない。

孤立無援の男が曲者の凶刃きょうじんに殪たおれようとした、まさにその時。

男の目前、花畑の中から、誰かがむくりと頭を起こしたのである。

背の高い花畑の中で昼寝でもしていたらしい。

男は驚いた。

刺客の一団も驚いた。

一番驚いたのが、花畑の中で眠りこけていたらしい人影である。

十二、三くらい少年だった。

小さな体を風変わりな袖無しの上着に包み、帽子の代わりか白いきれで頭を包んでいる。

目の前で何が起こっているのか、わからなかったに違いない。花畑に座りこんだまま、あつけにとられた表情で男たちを見つめている。

「危ない！ 逃げろ！」

殺されそうになっていた男が叫んだ。

はたして目撃者さえも残すまじとしたのか、刺客の一人が別の一人に目くばせしたのだ。

片づけろ、という合図だった。

その刺客も領き返して、まだしゃがみこんだままの少年に殺気をこめて走り寄った。

ひとり戦っていた男は、我が身を省みずこれを助けようとしたが、曲者はそうはさせない。横合いから他のものが素早く前に回りこんで行く手をさえぎった。

男が怒声をあげる。

「なんの罪咎えとがもない子どもまで殺す気か！」

憤怒の叫びだった。こんな子どもが己の犠牲になることへの悲痛な叫びだった。

しかし、とても助けられない。

曲者は剣をかざしながら容赦なく少年に襲いかかり、斬り伏せた。

いや、正確には斬り伏せようとしたのだ。

大上段に振りかぶった刃は、ぴたりと少年の頭を狙っており、誰が見ても次の瞬間には小さな体が血に染まって倒れると見えた。

ところがだ。

曲者の剣が少年の頭に振りおろされた時には、もうその姿はそこにはなかったのである。

「なにっ！」

曲者たちも男も目を疑った。

「ばかな！ どこへ行った！」

少年は地面に腰をおろしていたのだ。逃げるにしても視界の外まで動けるはずがない。

慌てる曲者の頭上で、ぴかっと刃が光った。

おそらくその男は自分の身に何が起こったかを察することもできなかつたに違いない。

困惑の表情を未だ顔に張りつけたまま、ぐらりと傾いで花畑に倒れこんだ。倒れた男の体から毒々しい色が流れだし、花畑を染めていった。

男たちは戦うのも忘れ、啞然としてその光景に見入ったのである。

一瞬の動作で宙高く飛びあがり、自分を殺そうとしていた曲者をあつという間に返り討ちにした少年は、無造作に剣をひっさげて立っていた。

剣を握った手と構えとが実にしっくりとなじんでいる。細い、頼りない少年の体なのに、その剣はすでに腕の一部になっているかのようだった。

何年も剣を扱っている熟練者でなければこうはならない。

人ひとり斬り殺しておきながら、その瞳には何の感情も浮かんでいない。

それどころか、今まさに斬りあいを始めようという男たちを不機嫌そうに見やり、鼻を鳴らしたのである。

「一人を相手に……ごお、ろく……十人？ 呆れた話だ。どういう理由があるか知らないが、気にいらぬいな。おまけに問答無用でおれまで殺そうとするとはどういうことだ」

言い放ち、殺されかかっていた男を振り向き、悠然と声をかけた。

「助太刀するぜ」

これには男のほうに驚いた。ぽかんと少年を見つめてしまう。

とても子どもの口調ではなかった。

助太刀すると言っても、戦えるような年齢ではないのだ。しかし、右手に握っているのは玩具の類の短剣ではなく、れっきとした戦士の使う長剣である。だがそれは、こんな歳の子どものには扱いかねる品物のはずだ。

話言葉と目に受ける印象と右手の剣があまりにもちぐはぐだった。

少年のほうはそんな男を尻目に軽い足取りで踏み

だしていた。敵が密集しているところを目がけて無造作に近づき、あつという間に二人を斬り伏せたのである。

恐ろしいほどの腕の冴えだった。

信じられないような足の早さであり、獣のような身のこなしだった。

男にとっては突然の援護だったが、安堵あんどするよりも我が目を疑ったくらいである。

どう見ても十二、三の子どもが、大剣を片手に精銳の騎士たちを斬りたてているのだ。

しかも強い。敵はさすがに踏みとどまり、数人がかりでこの少年を倒そうと必死になっているのに、倒れない。倒れないどころかたった一人で互角の立ちまわりを演じているのである。

あまりのことに、一瞬、今の状況さえ忘れて棒立ちになったが、そこはこの男も並々ならぬ剣士だった。瞬時に立ちなおし、剣を構えなおしていた。

「ご助勢、感謝する！」

味方を得た男の動きもまた、水を得た魚のごとくだった。防戦一方だった態勢から攻撃に転じ、縦横に剣を揮った。

二対七の戦いだったが、旅の男と少年とは、たちまち五人までを斬って倒し、残る二人はとてもかなわないと思つたのか、仲間を放り捨てて逃げだしていったのである。

後に残されたのは無残に踏みにじられた花畑と鮮やかな黄色を不気味に染める八つもの死体。

そして旅の男と剣を遣う少年である。

九死に一生を得た男は剣を拭って鞘に収め、息を整えながら、突然の味方を見やつた。

動きを止めたところは、ごくまっとうな子どもに見えた。男の胸の下くらいにやっとうな子どもにな体である。

しかし、男はその小さな少年に対して、丁寧な礼を述べた。

「危ういところをすまなかつた。礼を言う」

剣を収めた少年はあたりを見回し、首をかしげ、男をじつと見つめて話しかけてきた。

「君、この人？」

ますますもって珍妙な子どもだった。

大人に対する口のきき方くらい、この歳になれば知っているだろうに、まるで同い歳の友達に対するような口調である。

大きく男を見上げているその表情が固い。

「いや、俺もこのあたりにはあまり詳しくはない」

「教えてほしいんだけど、ここ……、どこ？」

男は首をかしげた。

ずいぶん妙なことを訊くものだと思つた。自分のいる位置を知らないというらしい。

少年は明らかに困惑していた。迷子というのではなく、自分の位置を見失ってしまった。いるべきはずのところではなく、違うところに来てしまった。

そんな感じだ。

剣をさげているのだが、貴族の子弟という身なり



ではない。

無地の淡い藤色の布地で作った胴着と、同色の下履き。大腿部はむきだしにして革の短靴を履いている。

並み外れて整った顔立ちをしていることに驚かされる。肌の色は薔薇の大理石のようだし、深い緑の双眼はまるで宝石のようだ。

農家の子どもには見えないし、狩猟を生業なりわいとしているわけでもなさそうだし、男はしばらく、その身み状じょうがどういふ種類のものなのか、考えこんでしまった。

少年が首をかしげる。

「助けた代わりと言っちゃあなんだけど、どこなのか教えてくれないかな？」

「これは、すまん。そうさな。ロシエの街道からはいぶ外れているが、モザイの近くだ」

「モザイ？」

男は驚いた。

どこから来たのか知らないが、服装からしてそう遠方でないことは明らかだ。なのに、このあたりでは一番の大都市の名を知らないとは……。

「モザイはパラストの地方都市のひとつだ。セレネイとの国境にも近いからな。大きな城じょうき砦がある。このすぐ近くだ」

「パラスト？」

今度こそ男は驚愕の顔つきになった。

「何を寝ぼけたことを言っている！ 中央を三分する大国のひとつではないか！」

今度は少年が驚いて男の言葉をさえぎった。

「ちよつと待ってよ？ まさか……。まさか、ここ、ボンジュイじゃないのか？」

「なんだその、ボンジュイ、というのは？」

男は真顔で聞き返した。他の人間よりも多少、多くの地理を頭に入れているはずの男の人生において、初めて聞く地名だった。

しかし、少年は目を真ん丸にして叫んだのである。

「やっぱり違うの？　じゃ、どこだ！」

「だから、先も言ったがモザイの近くだ。パラストのもっとも西であり、中央の入口だ」

少年は大きく呻いた。

慌てて体のあちこちを探りはじめる。腰の剣を確かめ、頭に手をやり、衣服を撫でる。最後に両手を広げてみて、少年は絶望的な呻きをもらした。

「どうなってるんだ、いったい」

少年が何を嘆いているのか男にはわからない。

それよりも、もっと気がかりなことがあった。

さっきの二人を逃がしてしまったのだ。ましてこの場には、花畑を毒々しい色に染めた死体がいくつも散乱している。急いで話しかけた。

「ここには危ない。お前、行き先は？」

「行き先？」

「そうだ。どこの子どもか知らんが、家が近くにあるならすぐに駆け戻って決して表に出るな。旅の途中だというなら一刻も早くここから立ちされ。さっ

きの連中が戻って来れば、必ずお前をも狙うだろう。あ、だが、東には向かうな。できるだけ遠ざかるんだ。命を救ってもらったというのに、あいにく何の礼もできないが、せめてもの気持ちとして、これを受けとくれ」

男は懐を探り、銀貨一枚を取りだして少年に差し出したが、少年は手を出そうとしない。首をかしげて男を見つめていた。

「君は？」

「なに？」

「君の行く先は？」

「俺は……、東へ向かう。デルフィニアへな。行かなければならない」

「じゃあ、一緒に行く」

「おい！」

「行くあてはないんだ」

少年はあっさりと言った。

「だいたい、人に東へ行くなって言うからには何か

危ないことがあるんだろう。なのに自分はそこへ行くって、どういうことさ？」

男はほとんど呆れて目の前の少年を眺めたのである。

頭ひとつ分以上も小さい、頼りない姿だ。なのに、深く輝く緑の瞳がまっすぐに自分を見つめ返してくる。その真摯な光にたじろいだ。

「行くあてが、ないと？」

「うん」

「身寄りはない？」

「ないよ」

男は、この相手をどうしたらいいものか、考えあぐねてしまった。

同行することはできない。これから今のような危険にさらされることは目に見えている。

しかし、少年は血に染まった花畑を見回して、男を促したのだ。

「はやく逃げたほうがいいんじゃないのか？」

その言葉に我に返った。

少年の素姓も、これからどうするのかということも、とりあえず後回しだ。

「わかった。来い」

男と少年は急いで殺人現場を立ち去った。街道から離れた野原とはいえ、いつ何時、人に見られないとも限らないのだ。

しかも、少年はともかく、男は顔にも体にも返り血をあげた、すさまじい姿である。

「さっきの連中、いったいなに？」

「俺も知りたい」

「生き残ったのが、また引き返して来るの？」

「おそろくな」

男は近くに馬を隠していた。

ひらりとまたがり、鞍くらの前に少年を乗せようとしたが、首を振って足をかけようとしない。

「いい。走る」

「馬鹿を言うな。急いでここから立ち去らねば、命

が危ないのだぞ」

「少なくとも、ぼくはその馬よりは早く走れる」

鞍の上で男はひっくり返りそうになった。

この子ども、頭は確かかと思った。

一面開けた野原のむこう、遠くの丘の上に、木が

一本立っているのが見える。

少年はその木をまっすぐ指さした。

「あの木まで、どっちが速いか競走しよう」

「おい。馬鹿を言つてないで早く……」

馬に乗れ、と言おうとした男だが、そのとたん少

年は走りだしていた。

「待て！」

男は手綱たづなを取り、馬の腹を蹴った。

少し急がせただけで軽やかに走る少年に追いつい

てしまう。男は馬上から、横を走っている少年を見

下ろして声をかけた。

「言わぬことではない。前に乗れ」

しかし、少年は走りながら馬上の男を見上げて、

にこりと笑ったのである。

「鞭むち、持つてる？」

「おい、困らせるな」

「使ったほうがいいよ」

言うなり、少年の速度が、ぐん、とあがった。

「な、につ！」

驚いたのは馬上の男のほうである。

上体を低く沈めたその姿が、みるみるうちに遠ざ

かりはじめたのだ。

「ばかなっ」

思わず鞭を揮っていた。栗毛くりげの馬もまた速度をあ

げる。

男を乗せた馬は全速力で疾走しはじめた。馬蹄ばていの

響きが地を揺らし、激しく土煙を立てる。

男の頬を風が切る。景色がみるみる後ろに遠ざか

る。

ところがだ。

それほどの勢いで馬を駆っているのに、前を走る

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。